

### ③ 日本史学を含めた非西洋史学の再構築と国際協働

**概要：**歴史学と日本文化に着目しつつ、グローバルな位置付けを明らかにし、特定国の文化を理解し相対化することで価値・理念の普遍性を見出していく。歴史を語るデータの偏りを意識し、英語・日本語以外の多言語史料も参照し、グローバルな視点からの相対的位置付けを明確化することで、日本の文系諸学をボトムアップする。

**キーワード：**グローバルヒストリー、歴史学史、日本文化、多言語史料

#### ア 背景

日本からの人文学における国際発信の在り方は、自然科学分野や社会科学分野とは一線を画す。例えば、歴史学には、日本史や西洋史といった特定の地域に着目した場合もあれば、地域を超えて相対的に世界の歴史を捉えようとするグローバルヒストリー研究が展開されている。文化に関しても、各国が独自の文化を持つという捉え方と、文化の特殊性を外から見る場合の多様な見方と位置付けがある。このように、特定の国において発展した歴史、哲学、思想に着目する観点と、外部からの理解・解釈・位置付けに着目する観点の両アプローチによって、人文学はより広く新たな展開を模索することができる。グローバルヒストリーの理論的構築が進められてはいるが、それぞれの国が所有し、蓄積するデータには少なからぬ違いがあり、また、グローバルヒストリーでは英語資料に大きく偏る傾向がある。過去に何が起こったのかを検討する際、日本語によるデータだけでは、その相対化、国際化するには限界がある。

#### イ 目的・目標

本ビジョンでの目的は二つある。第一に、特定の国を超え、さらには国と国との関係性の基に形成された歴史の事実を明らかにする際の歴史データの偏りに注目する。非英語史料を積極的に発掘し、検討することを通して、日本の近代歴史学をよりグローバルに、次なる世代へと受け継いでいくことができる。グローバルな視点からの歴史研究は、日本に留まらない世界的な歴史的事実とそこにおける歴史的教訓の共有を目標とすることで、翻って歴史的事実の新たな発見の可能性も高める。そこでは、英語と日本語以外の多言語史料を多言語に翻訳し、編纂する作業が極めて重要である。

第二に、日本文化の特殊性の強調に留まることなく、よりグローバルな視点から特定の文化を相対化し、個別性をグローバルという枠組みで捉え直すことを目的とする。特定国の文化論を個別に完結させることなく、相対的に位置付けることで、文化の普遍性を見出し、グローバルな価値理解を促す。

#### ウ 国内外の学術研究の状況・動向

グローバルヒストリーの視点は、既に国内外にあって活発に議論されてきた。例えば、日本における東洋史・西洋史の多言語史料の翻訳と史料集の編纂の実績を最

大限活用することで、広く日本以外の国々の研究者と連携した編纂作業に発展するための準備は整備されつつあるが、十分ではない。

日本文化研究については、大学共同利用機関法人人間文化研究機構が国際的に認知され、研究実施の場として位置付けられてきたが、日本語以外での日本文化研究は相対的にその活力を失いかけている。そこで、日本文化を広くアピールし、他国の文化との比較も含め、文系諸学のグローバル展開をボトムアップにつなげる。

## エ 中長期の学術構想

歴史的事実は特定の国の中だけでは完結せず、何が起こったのか、何が事実なのかという疑問は多面的・複層的な様相を持つ。過去にあった出来事を理解し、事実を紐解く作業も、また多面的でなくてはならない。歴史的事実について複数のテキストでの確認はもとより、歴史を語り伝える際に使用する言語の違いを考慮することが重要である。ここで提案する学術構想では、注目する対象のみならず、使用言語や活用資料に関して国際協働を重要視する。非西洋史学や日本文化について使用言語の幅を広げ、多様な視点や枠組みから検討をすることで、歴史、あるいは、文化について、グローバルな視点からの新たな人文学の展開を先導し、日本における文系諸学の一層のボトムアップを目指す。

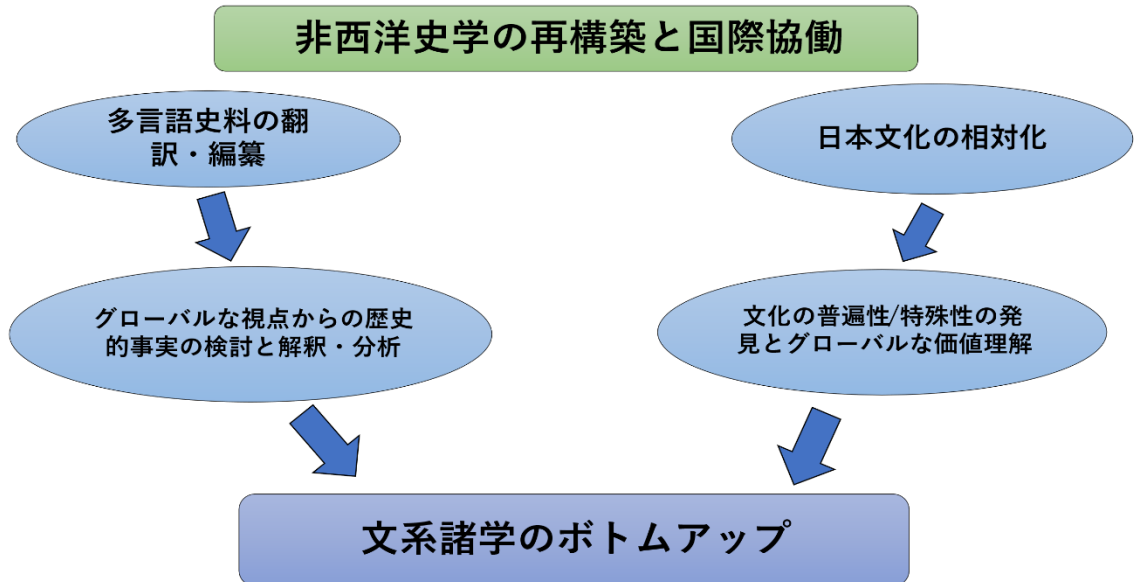


図4 文系諸学の今後の発展

(出典) 本提言にて、独自に作成